鳥取大学医学部医学科

「ヒューマン・コミュニケーションⅠⅡ」授業実践　　平成 26 年度

キーワード　人間力としてのコミュニケーション能力（共感的理解力、受容力、プレゼンテーション力）、体力（持続力）、気力（バイタリティ、チャレンジ精神）、ホスピタリティ・マインド、役立ち感、自己肯定感

①　はじめに

近年、医学部における人間性教育の必要性が「わが国の大学医学部（医科大学）白書２００３の検証と補遺（平成１６年５月）」の冒頭に緊急課題として取り上げられる中で、各大学で取り組みが始められている。全人的医療を実現できる医師の根幹となるものは豊かな人間性であり、人間性向上教育の充実は最重要課題となっている。

全人的医療を実践できる医療人を育てるためには、豊かな知識、優れた技術・態度をしっかりと支える医師のプロ意識・豊かな人間性が土台となる。その土台がしっかりしていないと患者本位の医療ができなくなり様々なトラブルを生じやすくなる。

これらの授業では、人と人とが確かな絆で結びつくことが求められている時代に、様々なテーマの「気づき（アウエアネス）の体験学習」で、ひたすら自分と向き合い自分を見つめ、今の自分自身の生き方や人間関係を見直し、人間関係を構築していく際に大切なコミュニケーションについて気づき学ぶ場とする。

さらに、授業で気づき学んだことを医学科学生は、乳幼児（１年次）や高齢者（２年次）とのマンツーマンでの継続的な関わり体験の中で体験的に理解する場とし、豊かな人間性を身につけるために、適切な礼儀やマナーを身につけ、良好な人間関係を構築するのに大切なホスピタリティ・マインドや自己肯定感やコミュニケーション能力を育む一助とする。

②　授業の概要

授業は、乳幼児や高齢者とのマンツーマンでの継続的な関わり体験(実習)に向けて、自分を見つめ生き方やふだんの人間関係を見直す「気づき（アウエアネス）の体験学習」から始まる。「気づき（アウエアネス）の体験学習」は、生き生きとした人間関係を求めて「コミュニケーションのあり方、聴き方再考、思いやり、大切にされた体験、相手の立場になって行動することを体験的に学ぶ、自分を知る」など様々な体験学習を行い、まず体験をして、体験で起きたことを自分で見つめる。「どうしてそうなったか」「次にどうしたらいいか」を自分に問いかけ考える。何かに気づくと、この次に同じような生活場面に出会ったとき、そのわかったことを「試す」ことになる。このように気づきによって自らが行動変容していけるように支援する学習を体験する。

試す場は、ふだんの生活場面だけでなく、この授業の核である乳幼児や高齢者との１対１の継続的な関わり体験で身をもって「試す」ことになる。継続的に同一の園児や高齢者と関わり体験をもつので、決して無責任な関わり方をしてはならない。パートナーの気持ちを、表情や言動からくみ取り、どうしたらよい人間関係が構築できるかを考え目標を立て行動する。うまくいかないと、次回の関わり体験の場ではどうしたらいいのかを考え計画を立てる。そして、園児や高齢者からの信頼を得ることで、関わり体験をより膨らませていくことを目標とする。

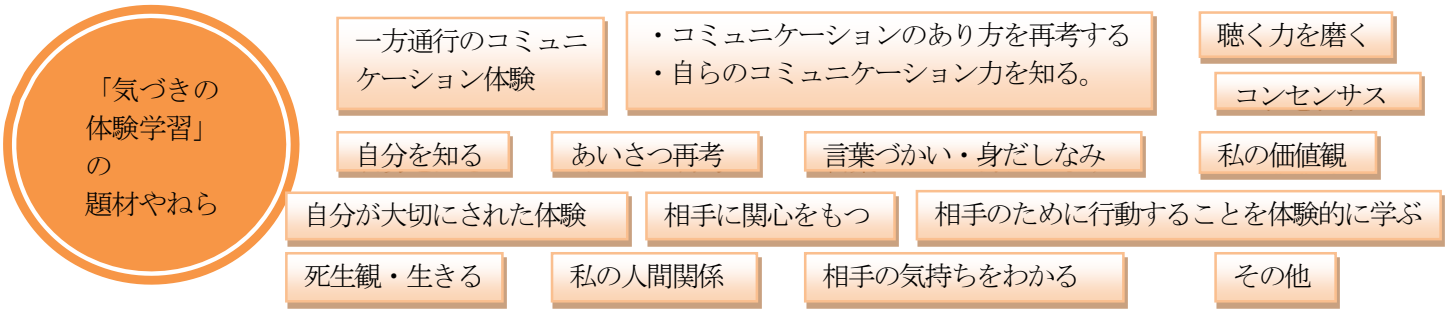
１年次生（前期）	○気づきの体験学習 ○交流準備 （１コマ 90 分×２）×５	○乳幼児との継続的関わり体験 （１コマ 90 分×２）×４	○ふりかえり・わかちあい ○気づきの体験学習 （１コマ 90 分×２）×１	○乳幼児との継続的関わり体験 （１コマ 90 分×２）×４	○気づきの体験学習 ○ふりかえり （１コマ 90 分×２）×１
２年次生（前期）	○気づきの体験学習 ○交流準備 （１コマ 90 分×２）×２	○高齢者との継続的関わり体験 （１コマ 90 分×２）×２	○ふりかえり・わかちあい ○気づきの体験学習 （１コマ 90 分×２）×１	○高齢者との継続的関わり体験 （１コマ 90 分×２）×２	○気づきの体験学習 ○ふりかえり （１コマ 90 分×１）×１

③　授業の目的

人間関係づくりに関する「気づきの場」と「直接体験の場」を授業の中に設けることで、自分自身の生き方やふだんの人間関係を見直し、ホスピタリティ・マインドやコミュニケーション能力を身につけたり、豊かな人間性を涵養する機会とし、将来、患者と向き合える医療人を育む一助とする。

④　授業の行動目標

◇「気づきの体験学習」：人間関係を構築するのに大切なコミュニケーションを学ぶ基礎編◇



〇行動目標

- 自分をみつめ、自分自身の生き方やふだんの人間関係を見直すことができる。
- 適切な礼儀や基本的マナーの身につけることができる。
- 相手の話に積極的に耳を傾け、相手の考えや気持ちを受け止めることができる。
- 自分の気持ちや考えを相手に伝えることができる。
- コミュニケーションがうまくいかないとき、「どうしてそうなったか」「次にどうしたらいいか」と自分をふりかえり、粘り強く次の体験にいかすことができる。
- 仲間に対して強い関心を持ち、ともに喜び合ったり、励ますことができる。

◇「乳幼児や高齢者施設の高齢者の方との継続的交流」：人間関係を構築するのに大切なコミュニケーションを気づき学ぶ実践編◇

〇行動目標

- 自分をみつめ、自分自身の生き方やふだんの人間関係を見直すことができる。
- 適切な礼儀や基本的マナーの身につけることができる。
- 相手と目線をあわせ、温かいまなざしで応対することができる。
- 相手の表情や行動から相手の気持ちをくみ取ることができる。
- 相手の気持ちや考えを受け止めた上で、行動することができる。
- コミュニケーションがうまくいかないとき、「どうしてそうなったか」「次にどうしたらいいか」と自分をふりかえり、粘り強く次の体験にいかすことができる。
- 自分や仲間の長所を素直に認めることができる。

⑤　期待される効果

〇学生

・適切な礼儀や基本的マナーの習得。
・ホスピタリテイ・マインド（思いやりの心）を育む。
・コミュニケーション能力を高める。
・役立ち感を実感し、自己肯定感の芽を育む。
・仲間との信頼関係の構築。
・健康な子どもや高齢者への理解。
・成長をふりかえり、いのちの畏敬・親への感謝、高齢者への尊敬の念。

〇受け入れ側（保育園側：乳幼児、保護者、保育士。高齢者施設側：高齢者、施設担当者）

・乳幼児：安心感や信頼感の形成、想像力や自発性などの基盤づくりに大切な体験。
・保護者：子どもと学生との関わりから新たな気づき。
・保育士：学生の姿からの気づき、距離をおいた園児の観察による気づき、園児たちの活動に広がり。
・高齢者：安心感や信頼感の形成。
・施設担当者：学生の姿からの気づきや距離をおいた高齢者の観察による気づき。

⑥　授業風景から

１年次学生：
気づきの体験学習
（生き方や人間関係を見つめ直す基礎編）

「電話によるコミュニケーション」の体験学習から、コミュニケーション（お互いの考えや気持ちを理解すること）のあり方について考える。また、自らのコミュニケーション力を知る一助とする。

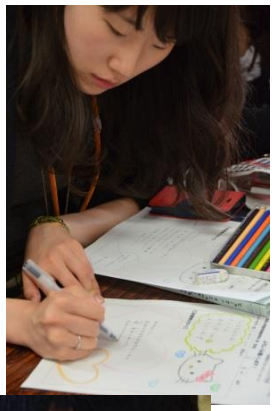
「あいさつ(挨拶)」再考

人を大切にする
「聴き方」再考

表情とコミュニケーション

アイスウオーム体験

様々な「体験学習」を体験した後、体験を「ふりかえり」「わかちあい」を行う。



乳幼児との関わり体験に向けて、パートナーの園児や保護者へのメッセージシートを作成する。

乳幼児との関わり体験（人間性を磨いたりコミュニケーションやホスピタリティマインドを体験を通して気づき学ぶ実践編）

継続して学生と乳幼児が１対１の関わり体験を行う

関心

責任

粘り強く
人間関係を
ゼロから構築
していく

２年次学生：
気づきの体験学習(生き方や人間関係を見つめ直す基礎編)
、

高齢者
施設
担当者
からの話

相手の考えや気持を理解しながら、相手のために行動することを体験的に気づき学ぶ
（二人で散歩）

「死生

高齢者の方との関わり体験（人間性を磨いたりコミュニケーションやホスピタリティマインドを体験を通して気づき学ぶ実

継続して学生と
高齢者施設利用者
の方が１対１の
関わり体験を行う

関心

責任

人間関係をゼロから構築していくときに大切なコミュニケーション体験

⑦　自分にあてた「励ましの手紙」より（医学科１年）

「ヒューマン・コミュニケーションⅠ」を受講して、気づき学んだことを中心に「もう一人の私」という親友から、

自分自身に向けて「励ましの手紙」を書いて仲間達の前で発表する。

□女子学生
　〇〇、あなたはこの３ケ月間「ヒューマン・コミュニケーションⅠ」の授業を通して多くのことを学んだね。今までずっと引っ込み思案で人の話をきくだけだったけど、今は初対面の人ともあまり壁を作らず積極的に話すことができているよ。でも人の悩みをきくのは上手だけど、自分の悩みを誰かにきいてもらうのがすごく苦手だよね。
　あなたの周りにはあなたを理解してくれて相談に乗ってくれる友達がたくさんいるんだから、たまには頼ってみるのもいいと思うよ。パートナーの〇〇ちゃんとはすぐ仲良くなれたけど、仲良くなればなる程言うことを聞いてくれないことが増えて困ったね。でもきちんと言いたいことを口にすれば〇〇ちゃんにも気持ちが伝わって、伝えることの大切さを学べたね。将来医師として一人の患者さんと向き合う時も、この授業や保育園実習で学んだことを忘れずに、患者さんや周りの人に信頼される人になろうね。

□男子学生
　３ケ月半の間、「ヒューマン・コミュニケーションⅠ」お疲れ様。あなたは元々、コミュニケーションをとることが苦手だったから、この授業は正直つらかったと思う。だけど最後までよく頑張ったと思うよ。それにこの講義のお蔭でコミュニケーションとはどういうものか、ほかの人といい関係を築くにはどういう姿勢や態度で話をきけばいいかなど多くのことを学ぶことができたよね。
　保育園の園児との関わり体験でもパートナーの〇〇ちゃんと関わっていく中で、いろんなことに気づいて、成長を実感できたと思う。毎回、関わり体験が終わった後に今回はどうだったか、何がいけなかったかふりかえり、次回はどうしたらいいか真剣に考えることができたのは本当にすごいことだと思うよ。この授業であなたは良い方向に大きく変わったと思うから、これからも授業で学んだことを活かせると思うよ。

□女子学生
　〇〇へ。あなたは普段無表情、愛想がないと言われているけどこの「ヒューマン・コミュニケーションⅠ」の授業での関わりでは、笑顔でパートナーと接していたね。全然キャラじゃないけど、少し高い声をだしたりオーバーリアクションをとったりと頑張ったね。こうやって色々と成長できたのもパートナーである〇〇ちゃんのおかげだね。
　初対面のときのことを覚えているかな。ずっと「ママー」って大泣きされていたよね。だけど、ゆっくりと自分達のペースで歩みよって、たくさん遊んで信頼関係を築いてきたよね。今では、朝クラスに行くと、〇〇ちゃんの方からかけよってきて、抱っこをねだってくれるようになったよね。うれしかったよね。これからの生活でもこの「ヒューマン・コミュニケーションⅠ」の授業で気づき・学んだことを活かしていきたいね。なるべく無表情の時間を減らしていこうね。

□女子学生
　入学当初、あなたは友達ができるかとても不安だったね。「ヒューマン・コミュニケーションⅠ」の授業で「きき方」などを学んで、少しずつコミュニケーションに自信が持てるようになったよね。この授業を通して、たくさんの医学科の仲間と話せるようになれてよかったね。人と話すことがこんなに楽しいことだって気づけたあなたは、４月のあなたから大きく成長できたと思うよ。
　乳幼児との関わり体験でも、たくさんのことを学べたね。相手の心をきくためには、まず自分から相手に近づいていくことが大切なんだってわかったよね。パートナーの〇〇ちゃんに出会って信頼関係を築く喜びを知れたね。〇〇ちゃんに出会えて本当に良かったね。
　もしも、あなたが「ヒューマン・コミュニケーションⅠ」の授業を受講しないまま医師になってしまったら思うと･･･。４月よりも素敵なあなたになれてよかったね。たくさんの人を幸せにできる温かさ持ち合わせた医師になろうね。

⑧ヒューマン・コミュニケーションⅠ・Ⅱを終えて（医学科２年学生レポートより）

◇「ヒューマン・コミュニケーションⅠ,Ⅱ」の授業をふりかえり、今思うこと（医療人を目指す医学科生として）

□女子学生
　昨年の春、「ヒューマン・コミュニケーションⅠ」の授業が始まった時、「コミュニケーションの授業とは一体何をするのか。学ぶことはあるのだろうか。」と思ったことは今でも忘れていない。そしてその後すぐに、「私は今まで全く人とコミュニケーションをとれていなかった。今まで誰かに失礼な態度をとっていたかもしれない。」と恥じたことも忘れていない。コミュニケーションは医師となったとき、患者との間で信頼関係を築く、とても重要なものである。
　また、この基本的なマナーも身につけられたのではないか、と思う。また、「死生観、生きるということ」の授業は本当に私にとって、将来医師になろうとしている者にとって、とても良い刺激のあるものであった。今まで「生」と「死」について全く考えたことがなかったのだ。しかし、医師となれば、「生」と「死」の間で必死に生きようとしている人や、生きる希望を見出すことのできない人がたくさんいる場に入るのだ。その中で、患者に信頼されるためにも何があってもブレることのない、「死生観」を確立しておくことは、必要になると思った。

□男子学生
　この授業を通して大きく３つ学んだことがあります。１つめは「相手のことを考える」ということです。このことは医療の現場で実際に必要なことで、それは医師主体の医療ではなく患者が主体となって医療を受けること、つまり患者さんを第一に考えることにつながると思います。次に、対話力を培うことができたと思います。この対話力とは、私は会話のやり取りから相手の言いたいことを把握しながら接していく力であると思うのです。私は園児との関わり体験においても、高齢者との関わり体験においても、相手が何を求めているのか、どういうことに興味があるのか、そういったことを会話の中かから理解するということを身につけることができたと思います。
　最後に、姿勢・態度の大切さです。園児や高齢者との関わり体験からだけでなく、学校での授業において、話を聞く姿勢や態度、話をする姿勢や態度の大切さを髙塚先生や関わった多くの人たちから学びました。自分の姿勢や態度一つで相手を不快にさせたり、快く感じさせたりすると思います。医療現場においても、患者さんと接する時に医師が横柄な態度、ふんぞり返った姿勢などあってはならないことで、こういったコミュニケーションをとる上で、これらのことは基礎になるものだと思います。この授業で学んだことを胸に、日々努力して行きたいと思います。

□女子学生
　最後の授業が終わり、今最後のレポート書いていて、寂しいような気持になっている。コミュニケーションについて学ぶ場はもう無いのだと思うと、これまでヒューマン・コミュニケーションの授業や実習で学んできたことは本当に貴重なものだったのだと感じる。鳥取大学医学部を志望した一つは、このヒューマン・コミュニケーションだった。この授業が紹介されたホームページを読みつつ、「この授業を全て受け終わったら自分はどうなっているのだろう」と、わくわくしていた覚えがある。
　今、あの頃期待していた通りの自分になれているかどうかはわからないが、間違いなくあの頃より成長できていると思う。医療の現場に出たら、初めて会う人、小さな子ども、お年寄りなど、様々な人とコミュニケーションをとらなければならない。声が出せない患者さんもいるかもしれない。そんな状況に直面したとき、「ヒューマン・コミュニケーションⅠⅡ」の授業を通して学んだことは必ず役に立つと思う。本来なら社会に出てから学んでいくようなことを、医学生のうちに学ぶことができて本当によかった。

□女子学生
　「医療現場というものは、コミュニケーションなしでは成り立ちません。」そのようなことは、耳にタコができるほど聞いてきました。じゃあどうするのか。どこで身につけろというのか。その答えを得たのが、この「ヒューマン・コミュニケーション」の授業でした。会話を卒なくこなせる人同士でもなかなか意志の疎通はうまくいかないものなのに、それが高齢となれば、幼児となればなおさらです。そんなとき、どうしたらいいんだろう、どうやったらこの人と仲良くなって喋られるんだろう。そう解決案を模索することがなによりも重要な姿勢なのだと気づかされました。すべての場面で使える解決法などなく、臨機応変に対応できる力を身につけること、そのために今から様々な人と関わりを持つことが大切なのだと思いました。これから、積極的にいろんな人と関わって自分のコミュニケーション力を育んでゆき、良い医療者になろうと思います。

□女子学生
　私は今まで多くの人々と関わり、そして今後もっと多くの人との関わりを持っていくこととなるだろう。人と関わる上で、コミュニケーションは必須であるが、ヒューマン・コミュニケーションでは、このコミュニケーションの難しさを実感した。そして、様々な体験学習や関わり体験を通して、まずは自分を見つめ、考え、そして相手を思うことで、少しでもより良いコミュニケーション力を身につけることができたのではないかと思う。将来、医師になれば、

多くの人との関わりを持つことになり、しかもその出会いの中には、心身ともに大きな傷を抱えた人、不安でいっぱいの人が少なくないはずである。そのような人々を前にし、自分はその人とどう関わっていくのか。まだ100%は分からないし、実際にそのような場面を迎えたとしても100%正しい答えを見つけられるかは分からない。

しかし、このヒューマン・コミュニケーションの授業で学んだことは、確かにそのような場面で役に立つことであった。「患者は心が串刺しの人」そのような人を前にしても、逃げることなく真正面から向き合い、相手の思いを受け入れることのできる心温かい医師になりたいと思う。そのためにも、この授業で学んだことを大切にし、これからも向き合い、考え続けていきたい。

□女子学生

将来、医療界を担う一員になるものとして、今回のヒューマン・コミュニケーションの授業、そして1年のときの授業は自分にとって必要不可欠なものであったと思う。医師という職業は何よりも人との関わり合いからから始まるし、関わり合う人も子どもからお年寄りまでと様々である。その様々な人に対応していくためにも、コミュニケーションが必要であり、場合に応じてノンバーバルなコミュニケーション方法や、相手の背景を考慮しながらの会話をすることなどの重要性を改めて、自分自身が様々な体験をすることで学ぶことができたと思う。この授業を受け始めた当初は、コミュニケーションなんて毎日やっているし、出来て当然だと思うことが多くあった。しかし、私が考えていたコミュニケーションはまだ甘いもので、この授業のおかげで医学生としてコミュニケーションを意識できるようになり、普段の人との関わり合いでも常に注意を払うようになった。この授業で学び得た全てが、人との関わり合いに通じ、そして相手の背景や家族、状況をしっかりと見定めることがこれからの医療には必要であり、地域医療として発展していくのだと思う。自分が医師になるのは当分先ではあるが、この長い期間を活かして、これからの関わり合いを大事にしていきたい。

□男子学生

コミュニケーションが得意か苦手かと問われれば苦手だと答えるし、好きか嫌いかと訊ねられたら親しい人とのそれは好きだと答える。それが受講前の自分の性格でありスタンスでありスタイルだった。授業を終えてどう変わったか考えてみてもあまり大きく変わったとも思えない。ただ、少しは自分から話しかけられるようになったし、人見知りをしなくなったという変化もあって、きっとその少しの変化が大事なんだろうと思う。

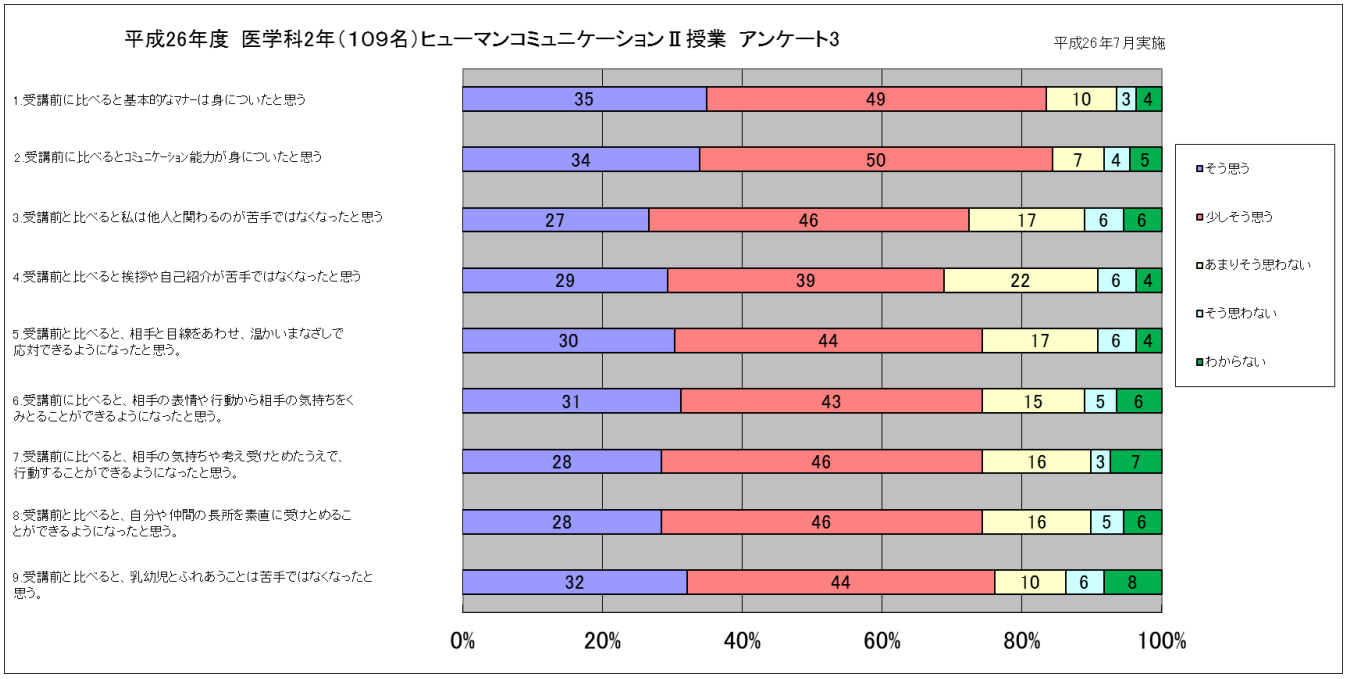
将来、医師として働く時にはコミュニケーションが苦手だからと行って避けられる訳でもなく、勿論避けられるルートもあるのだろうが、ある程度の接触は避けられないのだろう。自分達はそういうルートを選んできたという事を自覚できたのも、これからも必要であるという事を認識できたのも考えてみれば、この授業あっての事だったのかもしれない。子どもと関わるのなんて嫌だ、高齢者と会話なんて気が滅入る、と思い続けてきたけれど、終えてみればあっという間だったし、貴重な経験にもなった。すでに若干感じているのだろうなとは思いつつ、本当にありがたみがわかるのは医師になって患者と対面してからなのだろう。

□女子学生

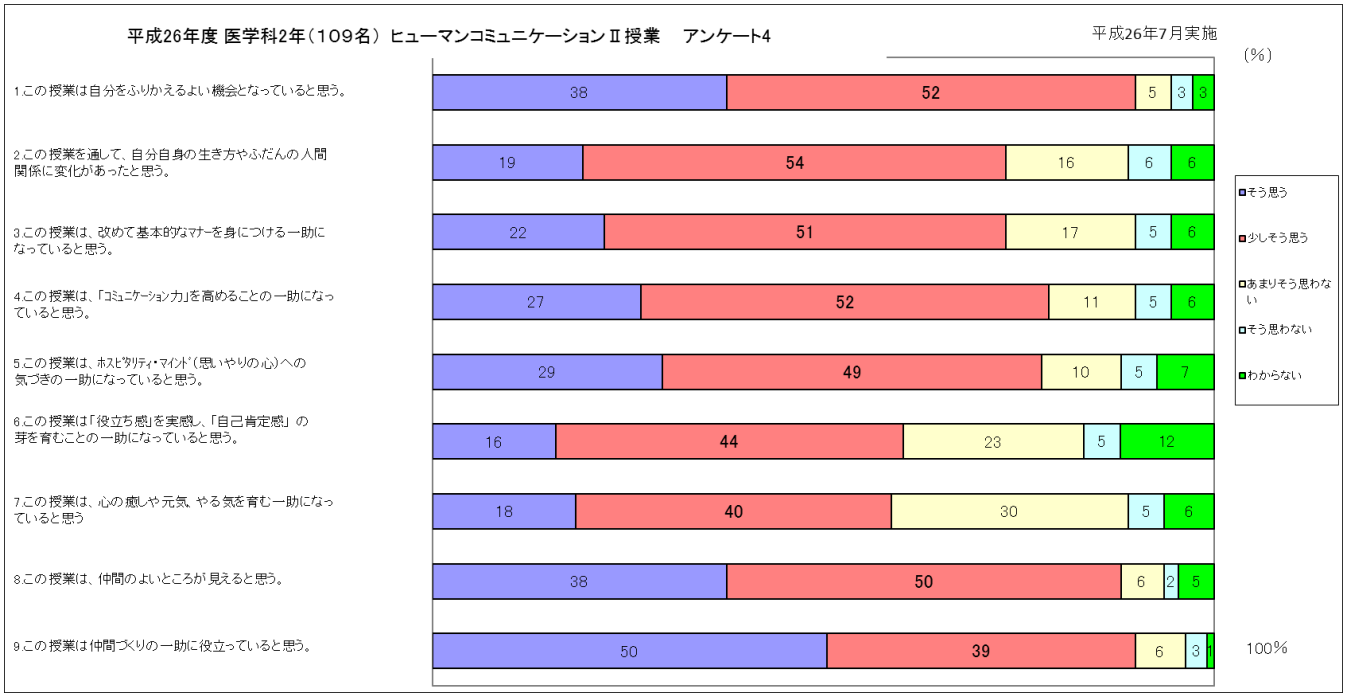
最初はあまり必要だと感じられなかったこの「ヒューマン・コミュニケーションⅠⅡ」の授業も、今ではその重要性がよくわかり、そして自分にはこの授業が必要であったんだということを実感している。人との対話だけでなく、自分についても知ることができ、今まで知らなかった、というまでもいかず、考えたこともなかった自分について考える良い機会になったと思う。自分が今まで当然できていると思っていたコミュニケーションも全く完璧なものではないし、そもそも完璧にするのは不可能なのではないかと感じた。

それぞれの人に、その人その人に対応したコミュニケーションをとることも重要であるし、それによってどんどん学んでいくことも多いと思う。これから何年もしたら、自分は医療の場で働き始めることになるのだが、そこでは、人と人との関わりが多く生まれるので、常にコミュニケーションは必要となってくる。もちろん知っている同じ職場で働く仲間の連携も医療の質を高める上で重要であるし、さらに重要なのは患者さんとの関わりである。私は、こちらを全く見て話してくれない医師に出会ったことがあるが、病気を治してもそれではだめではないかと感じた。将来は患者さんの心も軽くしてあげられるような、そういう医師になりたいと思う。

⑨意識調査より（平成26年度　医学科２年）



平成26年7月実施



平成26年7月実施

⑩　2年間の授業をふりかえって、人間的成長したこと　（平成26年度　医学科2年学生アンケートより）

(　)内は人数　複数回答

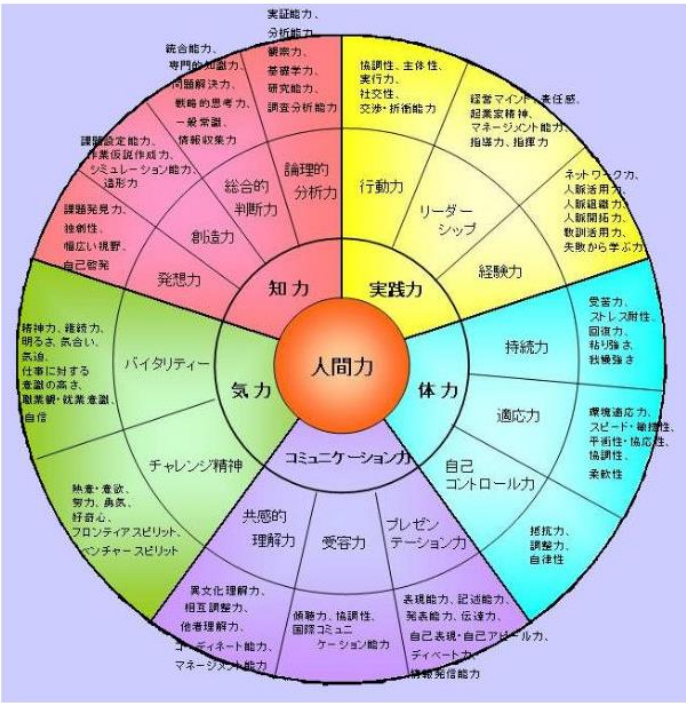
1.コミュニケーション力(50)
2.聴く力の向上(25)
3.他者を思いやること(16)
4.相手の立場で考える(11)
5.受容力を磨けた(8)
6.話す力(7)
7.挨拶の重要さに気づいた(6)
7.マナーを身につけた(6)
9.自分を好きになった(5)
10.死生観について深く考えるようになった(4).

⑪あなたの人間力

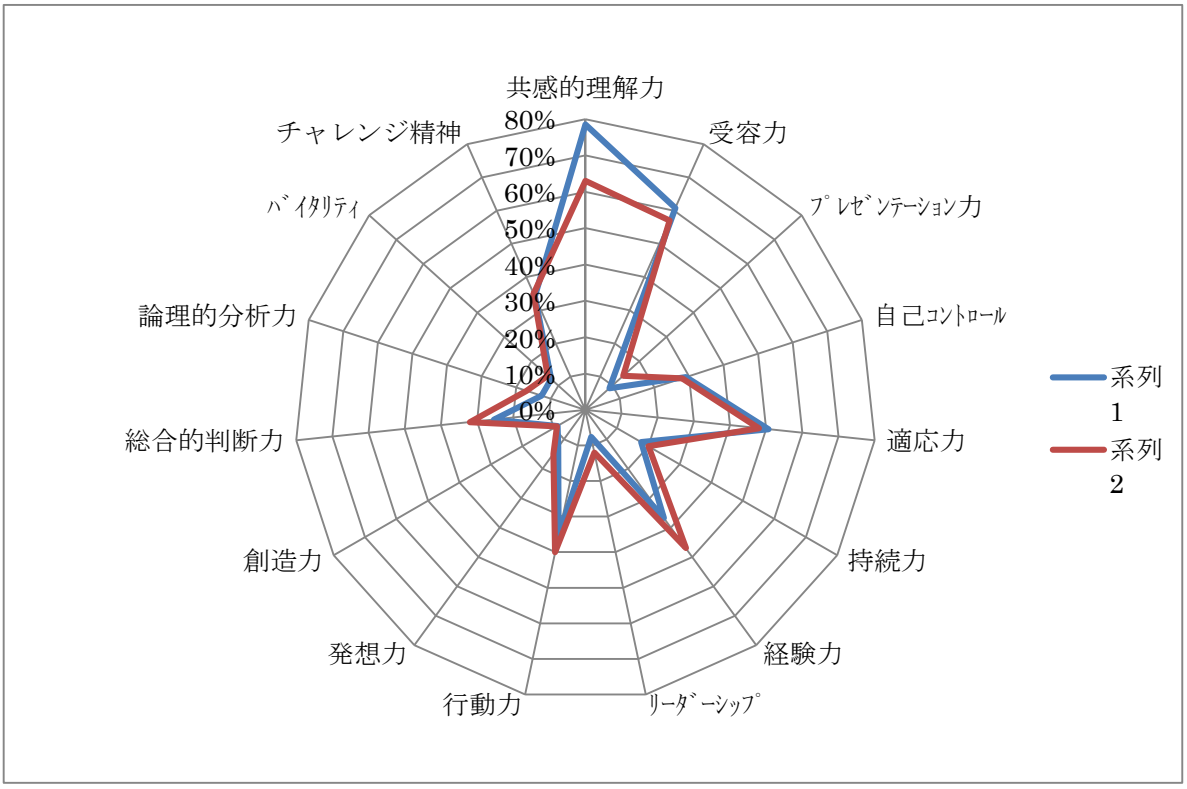
鳥取大学では、「人間力」を「知力」「実践力」「気力」「体力」「コミュニケーション力」の５つの構成要素から成り立つ総合的かつ人格的能力として定義しています。

「知と実践の融合」を教育・研究の理念とする本学では、この「融合」を教育の場で実現するため、「人間力」を本学独自に定義し、これを教育のグランドデザインの根底に据えて、在学中に全ての学生がその向上を目指すものとする。
「鳥取大学ホームページより」

「人間力」の考え方

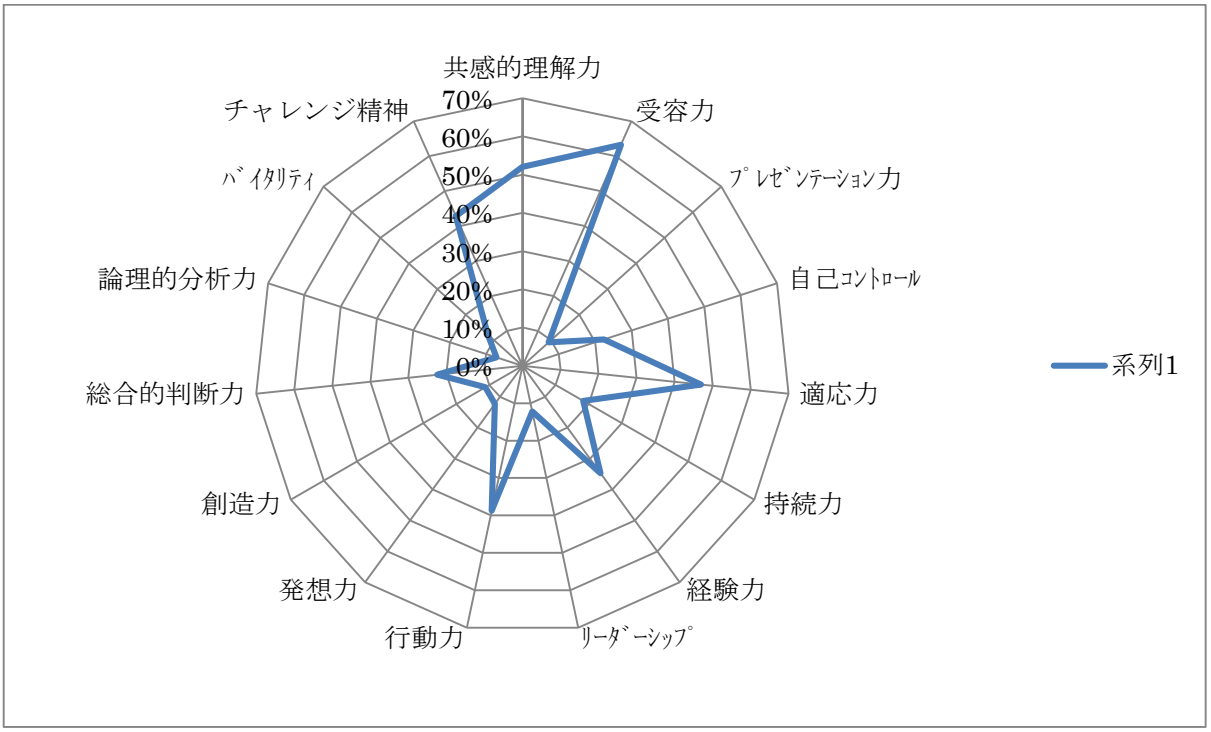


「ヒューマン・コミュニケーションＩＩ」講義を受講して、人間力の第２階層の中で身につけたと思うものはどれでしょうか」と学生に問うと下記のように、第２階層の「共感的理解力」、「受容力」（第１階層のコミュニケーション力）が半数を超える高い値になっている。（複数回答）



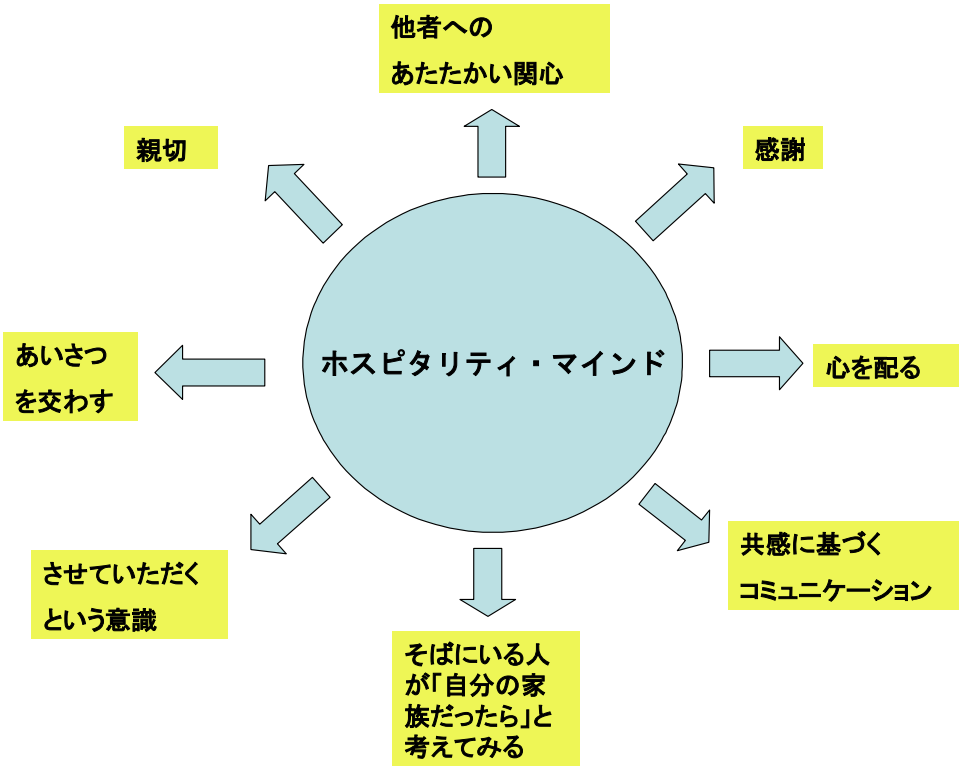
平成26年度医学科2年次生より

系列１（25年7月　医学科1年次105人　回答数76人）・系列２（26年7月医学科2年回答数104人）



平成26年度医学科1年次生より
系列1　26年7月105人　回答数 98人

⑫ホスピタリティ・マインドあふれる医療人を目指して



医学科の学生の多くは、将来、人と向き合う医療職に就くことになる。
医療人が、社会的な責任を果たしていくには、洗練されたプロ意識をもたねばならないが、プロ意識を支える基盤はなんといっても人間性に他ならない。

人間性が貧しかったら、道を踏み外し医療過誤や医療人としてのモラルが問われる事態になりかねない。この学習をステップにして、将来、患者さんの立場を尊重し、患者さん中心の医療を行い、ホスピタリティ・マインドあふれる人として、そして、医療人に人間成長してくれることを期待したい。

鳥取大学医学部

総合医学教育センター（平成 27 年２月）